

Vision

若手についての3つの迷信

Howard Hughes Medical Institute/Massachusetts General Hospital

小 泉 周

私が第一回将来計画委員会（松尾理委員長〔当時〕）の委員に選ばれたのは前世紀の終わり近く1999年のことであった。当時、医学部卒業後2年目でしかなかった私ではあるが、所属していた慶應義塾大学医学部生理学教室の金子章道教授（当時）から「学会員が集まって若手の意見を聞く会をやるんだけど、参加するか？」と言われ、「面白そうだ」と思って参加したのが最初だった（そんなわけで、まさか当日になるまで「将来計画委員会」という名の会議に恐れ多くも委員として参加するとは思ひもしなかった）。その会議の席上で、「若手の会」を作ってみてはどうか、という話が持ち上がり、現在の若手の会が作られたわけである。そんな経緯で、私自身、右も左も分からないところから手探りで生理学会の「若手」研究者の結集を目指したが、その過程で、当時から今まで、学会のあちこちで語られるいくつもの「若手についての迷信」に遭遇した。そんな若手の迷信をいくつかピックアップしてその真偽を考えてみたい。

<若手に関する3つの迷信>

(1) 生理学会には若手はいない。

第一回の将来計画委員会の席上から、この手の議論はよく聞かれていた。実際のところ、(旧)生理学教室や他の関連教室には（博士や修士の学生を含めて）若手は沢山いる。ただ、生理学会に入っていないだけなのだ。では、なぜ彼らは生理

学会には入らないのか？たしかにそれには金銭的な問題など多くの問題があるだろうが、たとえば、知り合いの若手に言わせると、「生理学会はお医者さんの学会だから」と敬遠していることがわかる。いろいろな人たちから話を聞くと、それが意外と大きな理由であることに気づく。「生理学会＝お医者さん学会」という先入観が非医学部出身の若手研究者の足を遠のかせているのではないだろうか。

(2) 若手は生理学に興味がない。

(1)と関連しているが、これもよく聞く話であった。若手は、生理学よりも分子生物学のような他の研究分野に興味があるといった主張である。しかし、ポストゲノムを迎えた今、「遺伝子」や「蛋白」さえ見つければそれで研究が終わるという時代ではなくなっている。そうした物質の機能や生理学的な意義を探る上で、生理学的手法の重要性を一番感じているのは実は非生理学会員の若手研究者である（実際、そうした手法を取り入れないと論文も通り難くなっている）。ただ、生理学会がそうした彼らの欲求を上手く取り込めてこなかっただけなのである。

たとえば、我々が中心になって行っている若手の会のサマースクールには、毎年100名から200名といった若手研究者がやってくる。その多くは、他分野を専攻している非生理学会員である。

このように若手研究者は生理学的手法に飢えている。しかし、生理学会が上手く彼らを取り込め

ていない。そうであるのであれば、たとえば、「他学会の若手会員であれば、生理学会大会に無料で参加できる」などといった、思い切った若手勧誘策を実践してみてもはどうだろうか？

(3) 若手はマニュアル本を好み生理学的手法を学ぶには辛抱が足りない

たとえば、よく「分子生物学的手法はマニュアル本でかけるくらい単純なものであるのに対して、生理学的手法はそんな生易しく覚えられないものではない」といった主張を聞くことがあるが、果たして本当にそうだろうか？単純と思われがちな「分子生物学的手法」にしても、実際に行ってみると多くの細かな Tips やテクニックがあり、マニュアル本通りにしたからといって 100% 成功するとは限らない。いずれにしても経験が重要だ。また、それに比べて生理学的手法がとてつもなく難しいものであるとはあまり思えない。

生理学（教室）には従来「生理学を学びたいければ、十年は丁稚奉公せよ」といった閉鎖的な雰囲気があり、各教室に流れる生理学の秘伝のテクニックは非生理学会員であるよそ者に軽々しく教えられないといった排他的な風潮があるのではないだろうか。

と、ここまで書いてきて、(1) も (2) も (3) についても、必ずしも「若手」に限った問題でないことに気づく。上述した全ての問題は、何も若手に限らず、今後の生理学会のあり方の問題として捉えるべきものなのではないだろうか？

たとえば、生理学会の常任幹事会は、医学部の

(旧) 生理学教室の教授やその出身者がほとんどを占めている。たしかに、ここ数年来私のような若造が常任幹事会の末席に名を連ねてはいるものの、私自身もそうした生理学教室出身者であるし、医師 (MD) でもある。学会の執行体制においては、若手や非 MD の他分野出身者の意見は非常にマイノリティーだ。こうした排他的な雰囲気が、上述した問題全てに通じているように思う。

研究費体制の変化などに伴って内外における学会の役割が、現在、大きく変わろうとしている。そんな中、今後の学会の大きな役割は生理学的手法を持った若手人材の育成と国際化・学際化を通じた情報共有の場となることであろう。日本の研究の未来のためにも、非学会員若手研究者の積極的な取り込みと生理学的手法の浸透、研究分野を超えた情報共有を学会として目指すべきだ。そんな中、Web やメーリングリストなどインターネットの活用は重要な情報発信源となるであろう。

一つ宣伝であるが、生理学的手法の情報共有をめざし、若手の会の活動の一つとして「電気生理学メーリングリスト」なるものをつくり、情報共有をしている (参加希望者は akoizumi-ns@umin.ac.jp までメールを下さい)。また、その活動の一貫として、2006 年 3 月の生理学会大会にて「遺伝子操作による電気生理の新たな展開 — 哺乳動物の脳神経システムを例にとって —」と題したシンポジウム (ワークショップ) を開催するので、ぜひお立ちよりいただきたい。